

作況ニュース（第7号）

水 稲
大 豆

（発行：令和7年8月22日） （編集：令和7年8月21日）

発行：秋田県農林水産部

水 稲

成熟期早まる！刈り遅れに注意！

－早期の落水を避け、高品質米の生産を－
－適切な乾燥・調製により胴割れ米発生防止を－

1 今後の気象の見通し

（1）東北地方1か月予報（8月23日～9月22日）【令和7年8月21日 仙台管区气象台発表】

＜予想される向こう1か月の天候＞

向こう1か月の気温は高い状態が続くでしょう。期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。また、期間の前半は降水量の少ない状態が続く所があるでしょう。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

週別の気温は、1週目（8月23日～29日）は、高い確率80%です。2週目（8月30日～9月5日）は、高い確率70%です。3～4週目（9月6日～19日）は、高い確率60%です。

次回の予報発表予定：1か月予報 毎週木曜日14時30分

3か月予報 9月22日（月）14時

【季節予報】

<https://www.jma-net.go.jp/sendai/data/tenkou/forecast/forecast.html>

【2週間気温予報 毎日随時更新】

<https://www.data.jma.go.jp/cpd/twoweek/?fuk=32>

2 県内の概況

（1）気象経過

【秋田地方气象台】

7月中旬： この期間、高気圧に覆われて晴れの日が多かった。旬平均気温は高く、全地点でかなり高い。旬降水量は少ない。旬間日照時間は多い。

7月下旬： この期間、高気圧に覆われて晴れの日が多かった。旬平均気温は高く、全地点でかなり高い。旬降水量は少なく、全地点でかなり少ない。旬間日照時間は概ね多い。

8月上旬： この期間、前線や気圧の谷の影響により曇りや雨の日が多く、5日から8日にかけて大雨の所があったが、前半は高気圧に覆われて晴れの日もあった。旬平均気温は高い。旬降水量は多い。旬間日照時間は概ね平年並。

〔旬統計値（秋田）〕

	気温 (℃)	平年差 (℃)	階級区分	降水量 (mm)	平年比 (%)	階級区分	日照時間 (hr)	平年比 (%)	階級区分
7月中旬	27.7	+4.6	かなり高い	3.5	5	かなり少ない	88.7	192	かなり多い
7月下旬	28.3	+3.3	かなり高い	0.0	0	かなり少ない	90.9	158	多い
8月上旬	27.4	+1.7	高い	169.0	363	かなり多い	69.5	110	平年並

（２）本田の生育

１）移植栽培

① 出穂状況調査

各地域振興局調査による出穂期は、全県で7月31日（平年差－2日）であった。地域別にみると、県北は7月30日（同－3日）、中央では7月31日（同－1日）、県南では7月31日（同－2日）であった。

表－１ 出穂期の状況（各地域振興局調査、全品種の平均）

全県			県北			中央			県南		
本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差
7/31	－1日	－2日	7/30	－1日	－3日	7/31	±0日	－1日	7/31	－1日	－2日

注）地域としての出穂期であり、全品種平均の出穂期である。

② 定点調査結果

定点調査結果（8月18日調査）では、あきたこまち（県内62地点）の㎡当たり穂数は404本（平年比91%）と少ないが、1穂当たり着粒数は81.7粒（同110%）と多いため、㎡当たり粳数32.8千粒（同100%）は平年並となった。また、出穂期は7月28日（平年差－4日）と平年より早かった。

ひとめぼれ（8地点）は、㎡当たり穂数が453本（平年比91%）、1穂当たり着粒数は70.0粒（同102%）、㎡当たり粳数は31.6千粒（同94%）であった。㎡当たり穂数が平年より少なく、1穂当たり着粒数は平年並のため、㎡当たり粳数は少なかった。また、出穂期は7月31日（平年差－2日）であった。

表－２ 定点調査結果（各地域振興局8月18日調査）

品種	地区	出穂期			㎡当たり穂数			1穂当たり着粒数			㎡当たり粳数		
		本年 (月日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	7/28	－2	－4	417	90	91	79.3	110	109	32.9	100	99
	中央	7/27	－2	－3	380	83	89	79.1	103	105	29.6	84	93
	県南	7/29	－2	－4	403	92	91	84.5	111	113	33.9	102	104
	全県	7/28	－2	－4	404	90	91	81.7	110	110	32.8	98	100
ひとめぼれ	中央	7/31	－1	－2	453	94	91	70.0	105	102	31.6	98	94

2) 直播栽培

① 直播定点調査ほの生育状況

全県の生育は、幼穂形成期 7 月 15 日（平年差－4 日）、減数分裂期 7 月 25 日（同－5 日）、出穂期 8 月 3 日（同－5 日）、穂揃期 8 月 9 日（同－4 日）であった。

本年の生育ステージは、6 月後半以降の高温により平年に比べて早くなった。

幼穂形成期頃の調査では、草丈 65.4cm（平年比 98%）、㎡当たり茎数 588 本（同 97%）、葉数 11.2 葉（平年差 +0.1 葉）、葉緑素計値 40.4（平年比 104%）であった。平年より茎数はやや少なく、葉緑素計値はやや高かった。

穂揃期頃の調査では、㎡当たり穂数 505 本（平年比 103%）、葉数 13.4 葉（平年差 +0.8 葉）、1 穂当たり着粒数 67.9 粒（平年比 104%）、㎡当たり粒数 34.0 千粒（同 107%）であった。平年より葉数は多く、穂数及び 1 穂当たり着粒数は多かった。

表－3 生育ステージ（湛水土中直播：品種 あきたこまち、各地域振興局調査）

設置場所	幼穂形成期			減数分裂期			出穂期			穂揃期		
	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)
農 試	7/18	±0	－1	7/26	－1	－5	8/5	＋1	－3	8/7	±0	－5
大館市	7/14	－8	－7	7/30	＋1	－2	8/7	－1	－4	8/14	＋3	－1
井川町	7/16	±0	－4	7/23	－3	－7	8/1	－1	－7	8/8	＋2	－5
美郷町	7/15	－1	－3	7/24	－1	－4	8/1	－6	－6	8/8	－7	－4
横手市	7/14	－4	－7	7/26	－2	－5	8/4	－2	－6	8/11	＋1	－3
全県	7/15	－4	－4	7/25	－1	－5	8/3	－2	－5	8/9	－0	－4

表－4 定点調査結果（湛水土中直播：品種 あきたこまち、各地域振興局：幼形期頃調査）

設置場所	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
農 試	75.6	105	116	500	95	83	10.9	＋0.4	＋0.4	37.9	92	96
大館市	57.4	81	91	564	107	89	11.4	－0.9	＋0.3	43.8	106	113
井川町	66.3	95	97	605	77	104	11.1	－0.6	－0.1	42.0	99	111
美郷町	63.7	100	94	530	88	95	11.0	＋0.0	－0.3	35.6	84	95
横手市	63.9	92	93	740	141	117	11.5	－0.8	＋0.4	42.6	112	106
全県	65.4	95	98	588	101	97	11.2	－0.4	＋0.1	40.4	98	104

表－5 定点調査結果（湛水土中直播：品種 あきたこまち、各地域振興局：穂揃期頃調査）

設置場所	㎡当たり穂数			葉数			1穂当たり着粒数			㎡当たり粒数		
	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
農 試	432	96	92	13.0	＋0.5	＋0.4	74.8	101	106	32.3	97	99
大館市	500	108	97	14.0	＋0.7	＋1.3	66.7	108	112	33.3	116	110
井川町	477	87	103	13.3	－0.2	＋0.6	68.7	126	108	32.8	110	111
美郷町	480	97	100	12.7	－0.1	＋0.1	68.8	111	103	33.0	108	105
横手市	637	138	123	14.0	＋0.9	＋1.4	60.4	89	91	38.5	123	113
全県	505	105	103	13.4	＋0.4	＋0.8	67.9	107	104	34.0	111	107

(3) 病害虫の発生概況

1) 斑点米カメムシ類

8月3～4半旬の巡回調査(80地点)における水田内での斑点米カメムシ類のすくい取り数(20回振り)は0.6頭(平成1.4頭)で少なく、発生地点率は20.0%(平成28.5%)で低かった。そのうち、アカスジカスミカメのすくい取り数は0.6頭(平成1.1頭)で少なく、発生地点率は20.0%(平成23.2%)でやや低かった。アカヒゲホソミドリカスミカメのすくい取り数は0.01頭(平成0.22頭)で少なく、発生地点率は1.3%(平成7.3%)で低かった。

2) いもち病

8月3～4半旬の巡回調査(80地点)における葉いもち上位2葉の発病株率は0.66%(平成1.13%)、同地点率は15.0%(平成25.8%)でいずれもやや低かった。

地域別では、県北の葉いもち上位2葉の発病株率が2.8%(平成1.2%)で高く、同地点率は38.5%(平成24.3%)でやや高かった。

3 当面の技術対策(8月下旬～10月上旬)

各地域振興局の調査によると、出穂期は全県で平成より2日早かった。7月中旬から8月1半旬までは高温多照で経過し、初期登熟は順調に進んでいると推定される。8月2～3半旬は平成並の気温で経過したが、今後の気温は高い見通しであることから、登熟の向上を図るための適正な水管理を徹底するとともに、刈り遅れによる品質低下を招かぬよう、適期の刈り取りを徹底する。

(1) 登熟の向上を図る水管理

今後、9月にかけて高温になる見通しのため、きめ細かい水管理を続ける。落水は出穂後30日を目安とするが、ほ場条件や田面の硬化程度により30日を超えてかん水できるほ場は、落水を遅らせて登熟向上を図る。落水時期が早いと、葉色の低下、葉の枯れ上がり、根の機能減退等により登熟が妨げられ、収量、品質、食味の低下を招くことが多いため、早期の落水は避ける。

気温が30℃以上になる場合は、用水の確保が可能であれば、かけ流しかん水を行い地温を下げ、根の機能減退を防止する。かけ流しかん水が困難な地域では、落水期間の短い間断かん水や午前にかん水するなど、水分供給と地温の低下に努める。また、水不足等で用水の確保が難しい場合は、溝切り跡への通水等により、土壌水分を補充し、夜間の地温低下を図る。

フェーン現象等の乾燥した風の強い日は、湛水状態を保ち、蒸散による稲体の水分消耗を軽減する。特に出穂後30日以降においても、用水の確保が可能な場合は、かん水し急激な枯れ上りを防止する。

(2) 適期の刈り取りと刈り遅れによる品質低下防止

出穂期後の日平均気温の積算による刈り取り適期の目安は、あきたこまち等の早生種では950～1,050℃、ひとめぼれ、めんこいな、ゆめおぼこ等の中生～晩生種は1,050～1,150℃である。

本年の気温は平年を上回る日が多く、積算値は早いペースで増加しており、出穂から刈り取り適期までの日数は平年より短くなる見通しである。加えて、出穂も早かったことから、刈り取り適期は平年より早いことが高い確率で見込まれる。

また、日照時間による刈り取り適期の目安では、本年は十分な日照時間が期待できるため、積算気温による判定を主に考える。最終的な刈り取り適期は、各ほ場毎に籾の黄化程度を確認し、黄化程度が90%に達した時点とする。

参考に、水稻定点調査ほの出穂期とアメダス観測データの積算気温や積算日照時間から予測した地域別の刈り取り適期の目安を資料編p. 27の表－16に記載した。

刈り遅れによる大きな影響は、胴割れ米の発生による品質低下である。あきたこまち等の早生品種では、積算気温1,100℃を超えると発生割合が増加し、特に本年のような高温年は発生しやすいため、適期刈り取りのほか、収穫後の乾燥・調製においても細心の注意を払う。また高温登熟の場合、白未熟粒の混入は、刈り遅れるほど多くなることが令和5年において明らかだったことに留意する。

（3）斑点米カメムシ類防除

8月21日に仙台管区气象台から発表された東北地方1か月予報によると、向こう1か月の気温は高いと予報されていることから、斑点米カメムシ類の活動が活発になると見込まれる。斑点米被害が懸念されるため、水田内雑草の発生ほ場等では以下の対策を行う。

1) 薬剤散布

斑点米は、登熟期後半から発生する割れ籾の増加に伴い、側部斑点米が主体となるので、2回目の防除が重要となる。そのため、ノビエなどの水田内雑草があるほ場、牧草地や休耕田などの発生源に隣接しているほ場では、出穂期24日後頃に、畦畔を含めたほ場全体に茎葉散布剤を散布する。

茎葉散布剤はキラップフロアブル・同粉剤DL（使用時期は収穫14日前まで）又はエクシードフロアブル・同粉剤DL（使用時期は収穫7日前まで）とする。

殺虫剤を散布する際は、養蜂業者などと連携をとり、蜜蜂などへの危害防止に努める。また、農薬飛散による周辺農作物への影響が懸念される場合は、飛散しにくい剤型や飛散防止ノズルを使用する等の飛散防止対策を講じる。

2) 雑草管理

畦畔・農道及び雑草地（法面や休耕田など）の草刈りは、稲の収穫2週間前以降に行う。

（4）倒伏したほ場での対応

倒伏が発生すると受光体勢が著しく悪化し、登熟の低下による減収と穂発芽による品質低下を招くことから、倒伏した場合は次の事項を実施する。

- ① ほ場に停滞水が確認される場合は解消に努める。
- ② 早期に倒伏した場合は、速やかに4株ずつ束ねて立て直し、穂が乾燥するようにする。
- ③ 登熟後期の場合は早めに刈り取るとともに、追い刈りや横刈り等により刈り取り精度の向上に努める。
- ④ 穂発芽した場合は、刈り分けを行い品質低下を防止する。

(5) 大雨により浸水・冠水したほ場での対応

浸冠水した場合は、速やかな排水を図る。また、畦畔や用排水路等の点検・修繕を行い、適切な水管理に努める。

冠水した稲は、体内水分を失いやすいので、ほ場を急激に乾かさない。

倒伏した場合は、(4)の対策を講じる。

ほ場内への漂着物は、収穫作業に支障をきたすため、見回りを行い、除去に努める。また、収穫作業も漂着物に注意して作業を行う。

(6) 台風等による被害対策

台風は強い風雨を伴うため、倒伏や風水害、進路によってはフェーン現象や潮風害の原因となる。

倒伏した場合は(4)の対策、フェーン現象等で乾燥した風が強い日は湛水状態とする。

(7) 作業計画

作付品種の熟期と栽培面積を考慮し、刈り遅れにならないよう乾燥・調製能力に合わせた作業計画を立てる。

また、カントリーエレベーターやライスセンターを利用する場合は、早めに作業計画を組む。

(8) コンバイン収穫

コンバイン収穫は、損失粒やワラ・穀粒の詰まりが発生しないように、稲の生育量に合わせた作業速度で行う。

また、収穫時の籾水分は25%以下が望ましく、収穫作業は稲体が乾燥している午前10時～午後5時頃に実施する。

コンバインによる収穫作業の能率向上のため、次の点は特に留意する。

- ① 作業開始前には入念に整備・点検をする。
- ② 機械操作の習熟を図る。
- ③ こぎ廻回転数を規定内に抑え、脱ぶ損傷粒が発生しないようにする。

(9) 高品位米に仕上げるための乾燥・調製

乾燥・調製は、米を商品として仕上げる大事な作業である。作業の良否が米の品質と食味に影響するため次の点に留意する。

1) 乾燥作業の留意点

ア 乾燥機の特徴、操作手順をよく理解する。

イ 高水分籾の刈り取りを避け、わら屑等の混入を少なくして籾の循環をよくする。

ウ 乾燥前、中、後のそれぞれの工程で正確な水分測定を行う。

エ 水分が多い籾や活青米の多い籾などは、籾含水率が18～20%まで低下した時点で乾燥機を休止し、籾全体のテンパリングを行ってから仕上げ乾燥する二段乾燥を実施する。

オ タイマー設定時間はやや短めとし過乾燥を防止する。自動水分計のものでもやや高めの水分で一時停止し、温度設定する時は粳の状態を考え、過乾燥にならないようにする。

カ 乾燥の仕上がりは、玄米水分15%とする。なお、過乾燥になると胴割粒が発生するとともに食味が低下するので注意する。

2) 調製作業（粳摺り・選別）

〔粳摺り〕

ア 粳摺り作業は、穀温が高いと肌ズレ米が発生しやすいので、穀温が常温まで低下してから行う。

イ 粳摺り機の処理量は米選機の能力に合わせ、米選機の能力以上に玄米を供給しない。

ウ ゴムロールの摩耗程度を点検し、試し摺りを行い脱ぶ率が80～85%になるよう調節する。全自動の場合もゴムロールの摩耗点検は必ず行う。

〔選別〕

ア 網目は1.9mmを基本とし、整粒歩合80%以上を確保する。

イ 規定範囲内の流量で選別する。

(10) 農作業事故の防止【秋の農作業安全運動（9月10日～10月20日）】

秋の農繁期（9～10月）は、コンバイン等の大型農業機械を扱う機会が多くなることから、機械の操作等には十分注意する。過去10年間に於ける本県の農作業死亡事故のうち約2割がこの時期に発生している。

農作業事故の未然防止のため、無理のない作業計画を立てるとともに作業時は体調を整え、作業に適した服装で行う。また、作業機械の事前点検・整備を徹底し、操作には細心の注意を払う。

(11) 稲わら等の有効活用推進

秋田県公害防止条例で、10月1日から11月10日までの期間は稲わら等の焼却が全面的に禁止されている。稲わらや粳殻は、本田へのすき込みや堆肥などにして有効活用を図る。

(12) 農薬の飛散防止と安全使用の徹底

- ① 農薬散布前に使用農薬のラベルの適用作物・使用方法等を確認する。
- ② 農薬散布時は、周辺作物などへの飛散防止対策を徹底する。
- ③ 体調管理や服装・装備等を万全にし、散布作業は涼しい時間帯に行う。
- ④ 農薬散布後は、防除器具を確実に洗浄する。
- ⑤ 防除履歴は必ず記録する。

【時期別・主要作業別指導事項】

月・旬	作業の種類	主 な 指 導 事 項
8 月下旬 ～ 10月上旬	登熟向上の水管理	○ 間断かん水を励行し、稲体の活力維持を図る。 ○ 落水時期は出穂後30日以降とする。
	刈り取り時期の判断	○ 品種別、ほ場別に刈り取り時期を正しく診断し、適期を逸せず刈り取りを行う。 ○ 籾の黄化程度を確認し、黄化程度90%を刈り取り適期とする。
	斑点米カメムシ類防除	○ 出穂期24日後頃に畦畔を含めたほ場全体にキラップ剤又はエクシード剤の茎葉散布剤を散布する。 ○ 草刈りは収穫2週間前以降に行う。
	倒伏したほ場での対応	○ 停滞水の解消に努める。 ○ 登熟後期に倒伏した場合は、早めに収穫作業に入る。 ○ 追い刈りや横刈り等により刈り取り精度の向上に努める。 ○ 穂発芽した場合は、刈り分けを行い品質低下を防止する。
	収穫・乾燥・調製	○ 水分の測定は、できる限りサンプル数を多くして行う。 ○ 二段乾燥で過乾燥の防止に努める。 ○ 網目は1.9mmを基本とし、整粒歩合80%以上に仕上げる。
	農作業事故の防止	○ 無理のない作業計画を立て、万全な体調で作業に適した服装で行う。 ○ 作業機械の事前点検・整備を徹底し、運転操作時は細心の注意をはらう。
	稲わらの有効活用	○ 稲わらや籾殻は焼却せずに堆肥にするなど有効活用を図る。 (10月1日から11月10日までの期間は稲わら等の焼却が全面的に禁止されている。)
	農薬飛散防止と安全使用	○ 散布前に使用農薬のラベルの適用作物・使用方法等を確認し、散布時は周辺作物などへの飛散防止対策を徹底する。 ○ 散布作業は涼しい時間帯に行い、適宜、休憩・水分補給をするなど体調管理に十分留意する。

大豆

子実病虫害の適期防除を

- － 降雨に備えてほ場の排水対策を徹底 －
- － 適期収穫による高品質大豆の生産 －

1 大豆の生育概況

(1) 全県の概況

播種作業の盛期は平年に比べ3日遅かったが、6～7月は高温で経過したため、全県の開花期は7月28日で平年より2日早くなった。7月の降水量がかなり少なかったため、葉の裏返り等の水分ストレス症状が見られた。

(2) 農業試験場（大豆作況調査試験）

農業試験場におけるリュウホウの開花期は、標播（6月3日播種）が7月21日（平年差－5日）、晩播（6月20日播種）が7月31日（同－3日）といずれも平年より早かった。また、播種から開花期までの日数は、標播が48日（同－5日）、晩播が41日（同－3日）といずれも短かった（表－1）。

標播のリュウホウにおける8月19日現在の生育は、草丈は103cm（平年比97%）と平年並、主茎節数は15.9節（平年差＋0.4節）と平年並、分枝数は3.6本（同＋0.2本）と平年並だった（表－2）。

晩播のリュウホウにおける8月19日現在の生育は、草丈は97cm（平年比96%）と平年よりやや短く、主茎節数は13.6節（平年差－0.5節）と平年よりやや少なく、分枝数は2.0本（同－0.9本）と平年より少なかった（表－2）。

表－1 農業試験場におけるリュウホウの播種期別開花状況

播種時期	播種日		開花期		播種から開花期までの日数	
	本年（月/日）	平年差（日）	本年（月/日）	平年差（日）	本年（日）	平年差（日）
標 播	6月 3日	±0	7月21日	－5	48	－5
晩 播	6月20日	±0	7月31日	－3	41	－3

注）平年値はH27～R6年のうち、最大値と最小値を除いた8か年の平均値。

表－2 農業試験場におけるリュウホウの生育状況

播種時期	播種日 (月/日)	調査日 (月/日)	草丈（cm）			主茎節数（節）			分枝数（本）		
			本年	前年比 (%)	平年比 (%)	本年	前年差 (節)	平年差 (節)	本年	前年差 (本)	平年差 (本)
標 播	6/ 3	7/31	94	97	116	14.9	+0.2	+1.7	2.9	－0.3	+0.9
		8/ 8	101	90	99	15.9	+0.1	+0.6	3.5	±0.0	+0.4
		8/19	103	90	97	15.9	+0.1	+0.4	3.6	－0.1	+0.2
晩 播	6/20	7/31	56	77	93	9.6	－0.8	±0.0	0.1	－0.5	－0.3
		8/ 8	71	74	84	12.3	－0.7	－0.6	1.1	－1.1	－0.9
		8/19	97	94	96	13.6	－0.2	－0.5	2.0	－0.6	－0.9

注）平年値はH27～R6年のうち、最大値と最小値を除いた8か年の平均値。

2 技術対策

(1) 紫斑病防除の徹底

- 1) 防除は開花期の20～30日後に行う。また、莢への感染時期である開花10～35日後頃に降雨が多い場合は1回目防除の約10日後に追加防除を行う。ほ場の開花時期に合わせて適期に防除する。
- 2) 2回目防除を実施する場合は、耐性菌の出現を回避するため、1回目に使用した薬剤と異なる薬剤を選択して散布する。
- 3) 刈り取りが遅れたり、刈り取り後脱穀せずに多湿状態で放置しておくと紫斑粒が増加するため、適期刈り取り及び速やかな乾燥に努める（防除基準p. 52を参照）。

(2) マメシクイガ防除の徹底

- 1) 子実の食害はマメシクイガによる被害が多く、被害粒率が30%を超えることもある。
- 2) 大豆連作2～3年目以降に被害が増大する傾向にある。
- 3) 連作により密度が高まるので、連作ほ場では8月下旬～9月上旬にパーマチオン水和剤、アグロスリン乳剤、アディオン乳剤のいずれかで防除する。
- 4) 上記以外の薬剤で防除を行う場合は、9月上旬に1～2回散布する（防除基準p. 56を参照）。
- 5) 無人航空機で防除する場合は、9月上旬に2回散布する（防除基準p. 401を参照）。

(3) カメムシ類防除の徹底

- 1) 子実を吸汁加害する主なカメムシ類はホソヘリカメムシ、ブチヒゲカメムシ、アオクサカメムシである。
- 2) 加害期間は若莢が着き始める頃から莢が黄熟する頃までにわたり、子実の被害は落莢、不稔粒、板莢、変色粒など加害時期によって異なる。
- 3) アグロスリン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤、パーマチオン水和剤などで9月上旬までに防除する。
- 4) アグロスリン乳剤、パーマチオン水和剤の8月下旬～9月上旬散布は、マメシクイガにも有効である（防除基準p. 56を参照）。
- 5) 無人航空機で防除する場合は、9月上旬に2回散布する（防除基準p. 401を参照）。

(4) 大雨による浸冠水被害軽減対策

明きょや排水路等の点検を行い、溝が崩れていたり流れが悪い場所は手直しするなど早めに補修し、停滞水の解消に努める。

浸冠水したほ場は、病害虫が発生しやすくなることから、発生状況に注意し、必要に応じて防除を行う。特に、茎疫病の発生が多くなるため、こまめなほ場巡回により、発病株の除去に努める。

(5) 排水対策の徹底

台風や秋雨による停滞水は刈り取り作業に影響することから、明きょや排水路の点検・補修などの排水対策を適切に行う。

(6) 収穫、乾燥、選別・調製の留意点

1) 収穫

収穫は、大豆の枯れ上がり程度、茎や子実の水分状態を見極めて計画的に行うことが重要である。また、コンバイン等の調整・試運転等は事前に済ませる。

また、水稻と共同の乾燥調製施設を使用する場合は、使用計画を調整し、刈り遅れを防ぐ。

- ① 大豆子実の外観品質は成熟期以降、徐々に低下するため、成熟期の早いほ場から収穫する。ほ場内の大型雑草や落葉の遅い株はあらかじめ抜き取る。
- ② 汚損粒の発生を抑えるため、茎水分50%以下（茎がポキッと折れる頃を目安）で刈り取りを行い、作業は朝露により子実が湿った時間帯を避ける。
- ③ コンバインへの土の掻き込みは汚損粒発生的主要原因であるため、土を掻き込まない刈高にあらかじめ調整する。また、排水性の悪いほ場や滞水し易い箇所は、コンバインの沈下に伴う土の掻き込みが予想されるため、事前には場の滞水程度を観察する。
- ④ 脱穀後は風通しのよい場所に置く。乾燥施設等の都合で刈り取り後、直ちに乾燥作業を行うことができない場合は、保管場所や保管方法に配慮する。

2) 乾燥

乾燥前の子実水分と乾燥条件により、しわ粒や裂皮粒等の被害粒が発生する場合があるので注意する。また、乾燥温度の目安は、次のとおりである。

- ① 子実水分18%の場合 室温 +15℃以下
- ② 子実水分22%の場合 室温 + 8℃以下
- ③ 子実水分26%の場合 無加温（常温通風）

※送風温度は30℃以下、乾燥速度は0.4%/h以下とし、子実水分を15%に仕上げる。

3) 選別・調製

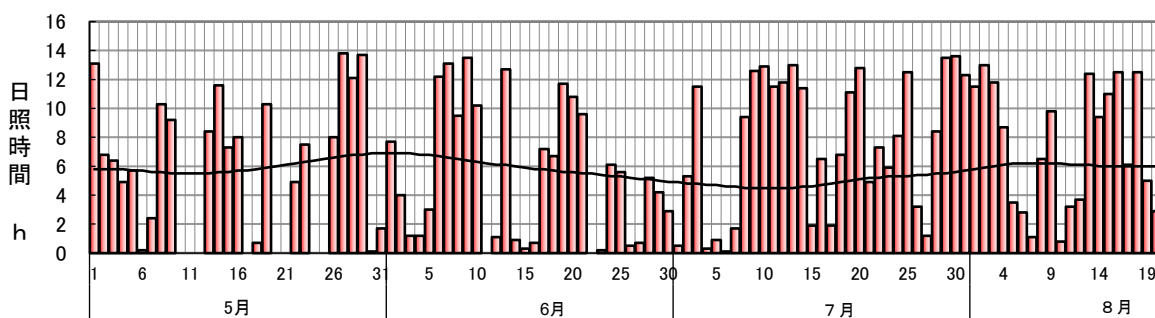
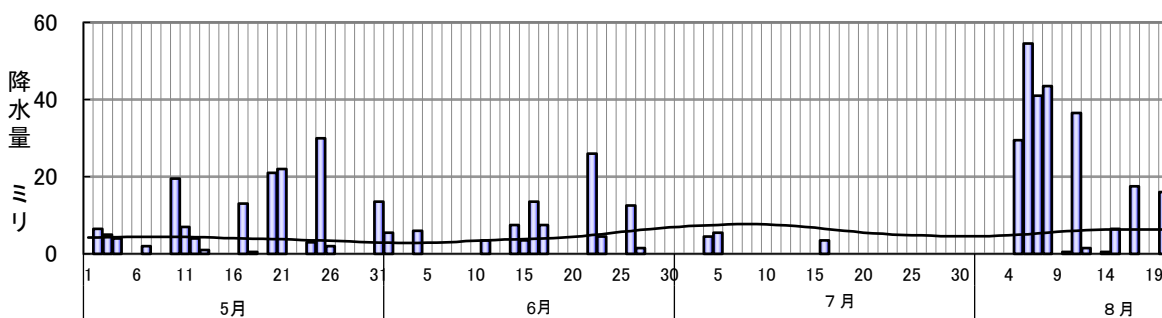
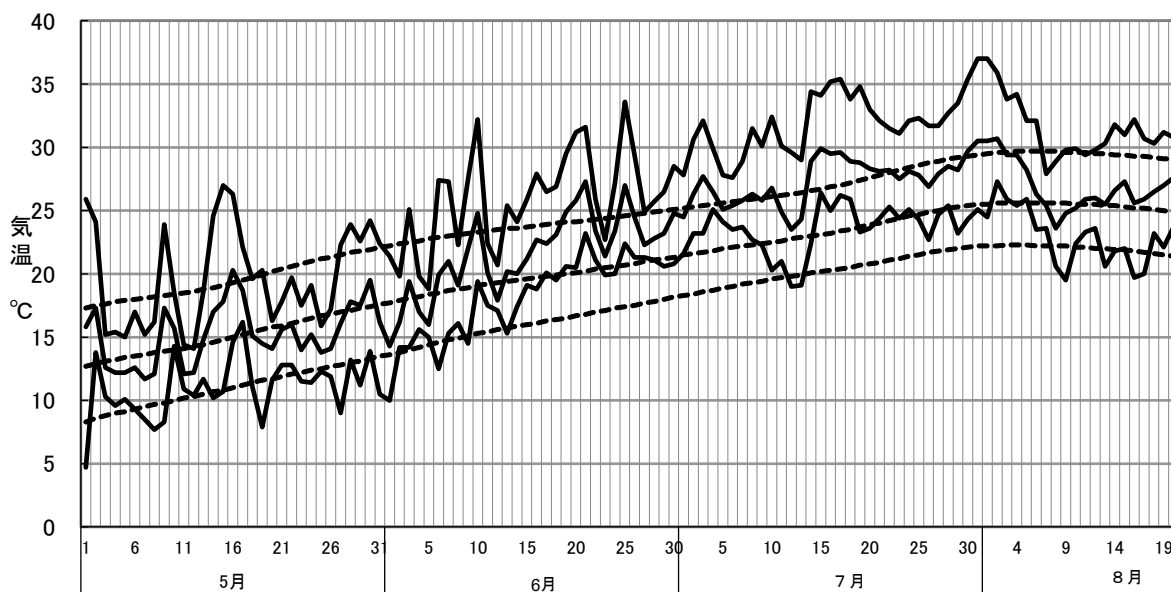
仕上げ乾燥後、選別機で夾雑物や被害粒等を除去し、整粒歩合の高い高品質な大豆に仕上げる。粒径選別に用いる篩い目は、大粒は7.9mm、中粒は7.3mm、小粒は5.5mm、極小粒は4.9mmを使用する。

資 料 編

1 気象経過

(1) 令和7年5月1日から8月20日の気象経過図(観測地点：秋田地方気象台)

(気象庁HPより)



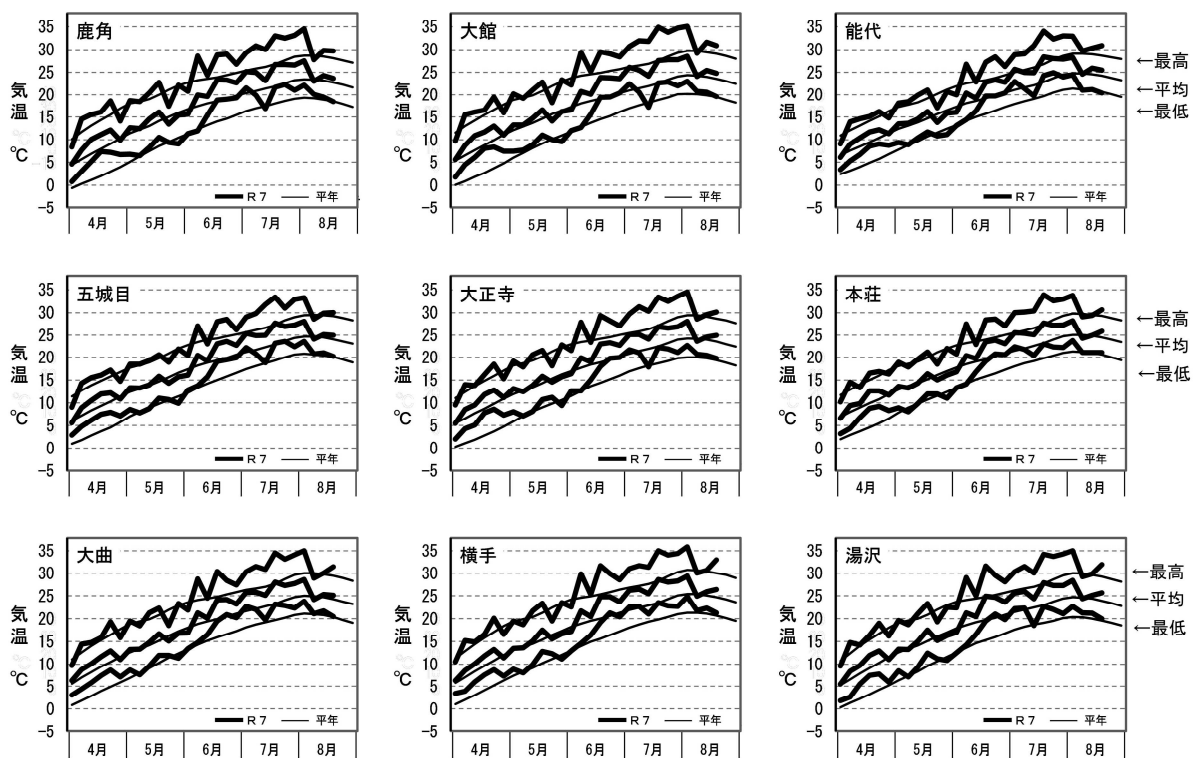
(2) 旬別気象状況 (秋田市)

(秋田地方気象台HPより)

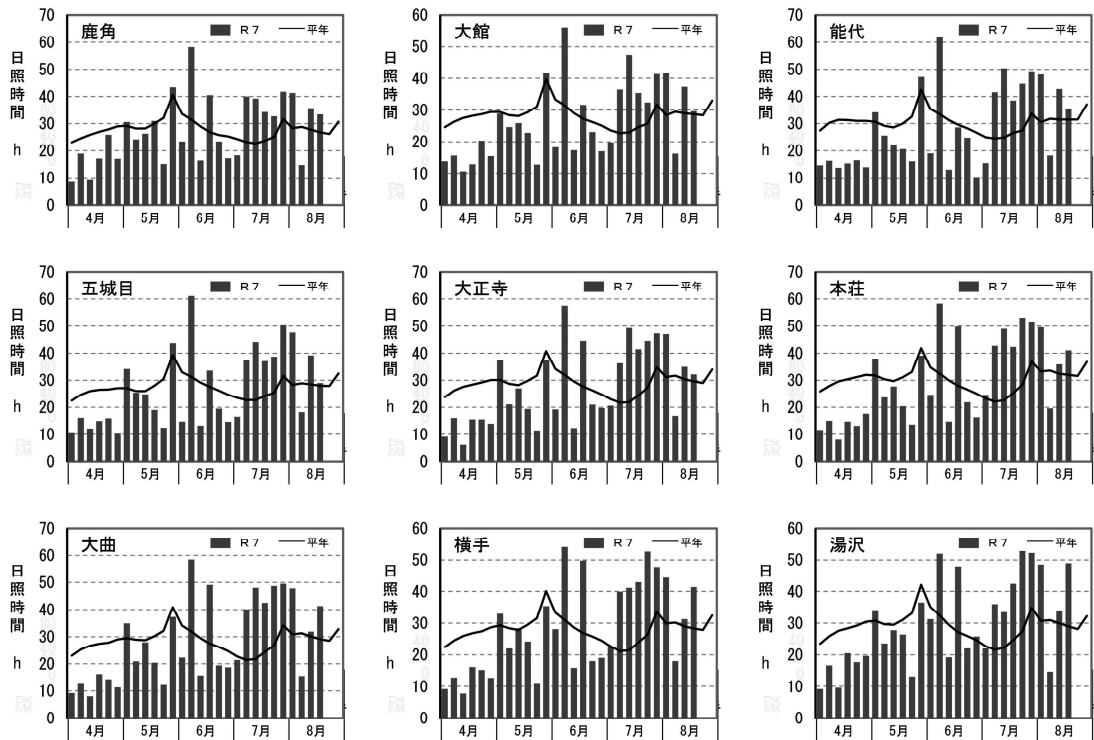
項目 \ 時期	7月上旬		7月中旬		7月下旬		7月 計	
	本 年	平年比較	本 年	平年比較	本 年	平年比較	本 年	平年比較
平均気温(℃)	26.0	+3.9℃	27.7	+4.6℃	28.3	+3.3℃	27.4	+4.0℃
降水量(mm)	10.0	13%	3.5	5%	0.0	0%	13.5	7%
日照時間(hr)	55.2	118%	88.7	%	90.9	158%	234.8	156%

項目 \ 時期	8月上旬	
	本 年	平年比較
平均気温(℃)	27.4	+1.7℃
降水量(mm)	169.0	363%
日照時間(hr)	69.5	110%

(3) 地域別気象経過



図ー1 各地域の気温 (半旬別、各地アメダス観測地点、8月4半旬まで)



図－２ 各地域の日照時間半旬別、各地アメダス観測地点、８月４半旬まで)

２ 定点調査結果

表－１ 定点調査結果（７月25日調査、品種：あきたこまち）

地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
鹿 角	5	85.4	105	117	449	81	82	13.1	-0.2	0.6	38.0	92	99
北秋田	8	85.7	102	113	481	93	96	12.9	0.0	0.3	39.6	91	102
山 本	9	84.4	103	112	422	98	89	12.9	-0.1	0.4	35.6	92	91
秋 田	9	86.3	99	109	412	84	92	13.2	0.0	0.6	34.4	84	89
由 利	2	83.5	99	114	447	84	96	12.8	0.5	0.9	33.9	87	88
仙 北	10	86.7	104	116	436	96	91	12.8	-0.2	0.5	37.5	89	95
平 鹿	11	85.2	102	111	405	86	82	13.1	0.2	0.7	40.5	100	100
雄 勝	8	85.2	103	112	430	98	89	12.7	-0.3	0.3	37.5	89	92
全県平均	62	85.5	102	113	431	91	89	13.0	0.0	0.6	37.5	91	95
7月25日の 理想生育量		目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限
	県北	72	69	74	504	479	529	12.0	11.8	12.2	39	38	40
	中央	70	69	72	491	456	527	11.9	11.7	12.2	38	36	39
	県南	74	72	75	437	420	454	12.3	12.1	12.5	38	37	39

表－２ 定点調査結果（７月25日調査、品種：ひとめぼれ）

地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
秋田	2	83.3	107	115	484	88	88	12.8	-0.2	0.5	32.3	88	89
由利	6	84.5	101	110	485	92	92	12.8	0.2	0.5	30.8	92	88
中央地区平均	8	84.2	102	112	485	90	90	12.8	0.1	0.5	31.2	91	88

表－３ 定点調査結果（７月25日調査、品種地区別）

品種	地区	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	85.1	103	113	450	92	90	13.0	0.0	0.5	37.6	91	97
	中央	85.8	99	110	418	84	92	13.1	0.1	0.6	34.3	85	89
	県南	85.7	103	113	422	93	87	12.9	-0.1	0.5	38.7	93	96
	全県	85.5	102	113	431	91	89	13.0	0.0	0.6	37.5	91	95
ひとめぼれ	中央	84.2	102	112	485	90	90	12.8	0.1	0.5	31.2	91	88

表－４ 定点調査結果（８月18日調査、品種：あきたこまち）

地域振興局	調査点数	出穂期			㎡当たり穂数			1穂あたり着粒数			㎡当たり籾数		
		本年 (月日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
鹿角	5	7/28	-2	-4	406	82	84	82.8	112	121	33.3	93	101
北秋田	8	7/27	-1	-3	448	92	97	74.7	114	105	33.5	104	102
山本	9	7/29	-1	-3	395	95	90	81.5	107	106	32.2	102	96
秋田	9	7/27	-2	-3	377	82	89	81.2	104	107	30.1	84	94
由利	2	7/30	-1	-3	396	85	90	69.6	100	96	27.2	84	87
仙北	10	7/28	-3	-4	415	93	94	83.2	113	113	34.3	105	107
平鹿	11	7/30	-2	-4	392	90	89	90.3	116	118	35.4	105	106
雄勝	8	7/29	-1	-4	404	92	91	78.2	101	107	31.4	93	97
全県平均	62	7/28	-2	-4	404	90	91	81.7	110	110	32.8	98	100
収量構成要素の目標値 (目標数量:570kg/10a)					県北	中央	県南	県北	中央	県南	県北	中央	県南
					450	440	415	70	69	73	31.5	30.4	30.3

表－５ 定点調査結果（８月18日調査、品種：ひとめぼれ）

地域振興局	調査点数	出穂期			㎡当たり穂数			1穂あたり着粒数			㎡当たり籾数		
		本年 (月日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
秋田	2	7/31	-3	-5	463	91	90	67.0	114	97	30.7	104	88
由利	6	7/31	-1	-2	450	95	92	70.9	103	104	31.8	97	96
中央地区平均	8	7/31	-1	-2	453	94	91	70.0	105	102	31.6	98	94

表－６ 定点調査結果（８月18日調査、品種地区別）

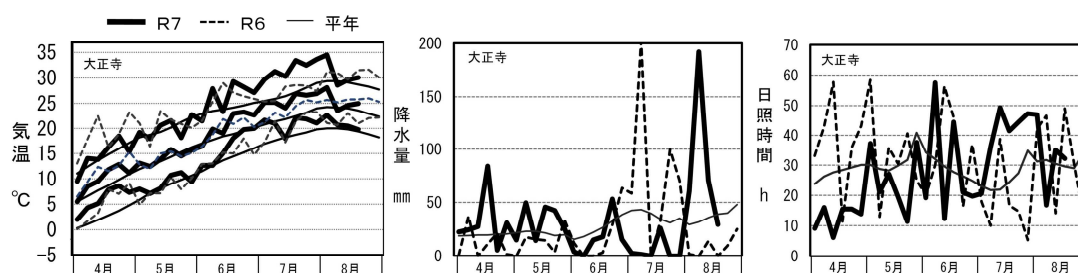
品種	地区	出穂期			㎡当たり穂数			1穂あたり着粒数			㎡当たり籾数		
		本年 (月日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	7/28	-2	-4	417	90	91	79.3	110	109	32.9	100	99
	中央	7/27	-2	-3	380	83	89	79.1	103	105	29.6	84	93
	県南	7/29	-2	-4	403	92	91	84.5	111	113	33.9	102	104
	全県	7/28	-2	-4	404	90	91	81.7	110	110	32.8	98	100
ひとめぼれ	中央	7/31	-1	-2	453	94	91	70.0	105	102	31.6	98	94

3 関連成績

(1) 気象感応試験

1) 稲作期間の気象（7月5半旬～8月4半旬）

7月5半旬～8月1半旬は、最高気温で35℃を超える日が6日連続あり、特異な高温期間だった。8月2～3半旬は降雨日が多く、気温は平年並に経過したが、日照の少ない期間だった。8月4半旬は、周期的な変化の気象だったが、気温は平年より高めに推移した。



図－3 令和7年の稲作期間中の気象経過
(半旬別、アメダス観測地点“大正寺”8月4半旬まで)

2) 農試ほ場の生育概況

<減数分裂期の生育状況>

標植は、草丈78.1cm（平年比107%）、 m^2 当たり茎数414本（同83%）、葉数12.6葉（平年差+0.2葉）、葉緑素計値32.1（平年比90%）だった。また晩植は、草丈80.1cm（同106%）、 m^2 当たり茎数457本（同100%）、葉数12.7葉（平年差±0.0葉）、葉緑素計値31.3（平年比90%）だった。

両区とも草丈は平年より長く、茎数は標植で平年より少なかった。また葉緑素計値は両区で平年より低かった。

表－7 農試気象感応試験（減数分裂期）の生育状況

試験区	減数分裂期	(平年差)	草 丈			m^2 当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
			本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
標植	7月18日	(-5日)	78.1	108	107	414	76	83	12.6	-0.4	+0.2	32.1	94	90
晩植	7月22日	(-5日)	80.1	105	106	457	100	100	12.7	-0.2	±0.0	31.3	89	90

注1. 移植日: 標植 5月15日、晩植 5月26日

注2. 調査日: 標植 7月18日、晩植 7月22日

注3. 平年値は、標植はH12～R6、晩植はH29～R6の平均。

<穂揃期の生育状況>

標植は、草丈93.7cm（平年比101%）、 m^2 当たり茎数351本（同78%）、葉数13.1葉（平年差+0.2葉）、葉緑素計値35.6（平年比92%）だった。また晩植は、草丈97cm（同102%）、 m^2 当たり茎数400本（同94%）、葉数13.2葉（平年差+0.1葉）、葉緑素計値35.7（平年比99%）だった。

両区とも草丈は平年並、標植では茎数が平年よりかなり少なく、葉緑素計値も低かった。

表－8 農試気象感応試験(穂揃期)の生育状況

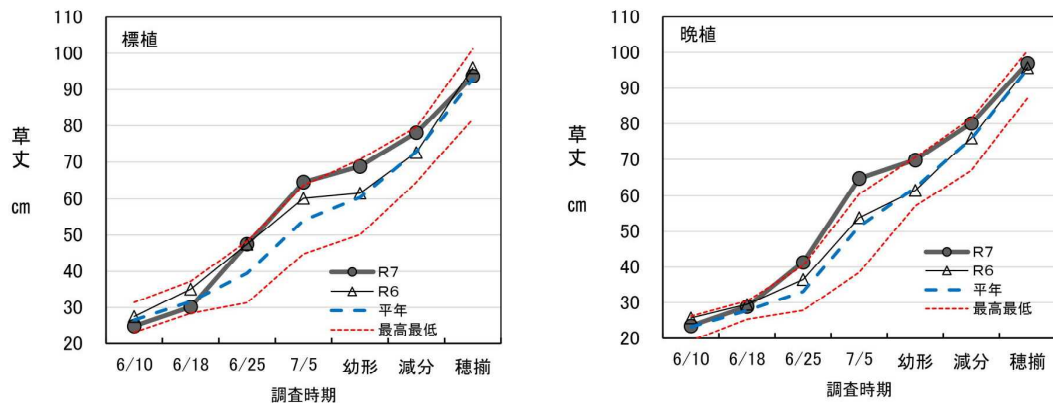
試験区	出穂期	(平年差)	草 丈			㎡当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
			本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
標植	7月25日	(-6日)	93.7	98	101	351	74	78	13.1	±0.0	+0.2	35.6	90	92
晩植	7月29日	(-5日)	97.0	101	102	400	90	94	13.2	+0.2	+0.1	35.7	92	99

注1. 移植日: 標植 5月15日、晩植 5月26日
 注2. 調査日(穂揃期): 標植 7月28日、晩植 7月31日
 注3. 窒素施用量: 農試基肥0.7kg/a、減数分裂期追肥0.2kg/a
 注4. 茎数は出穂した茎と未出穂の茎の合計
 注5. 平年値は、標植はH12～R6、晩植はH29～R6の平均。

<これまでの生育経過図>

① 草丈

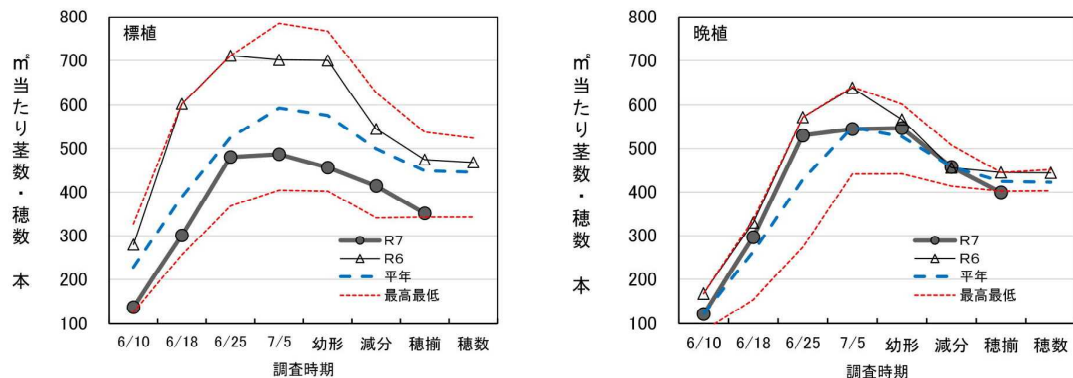
両区とも6月下旬に草丈が急伸し、減数分裂期まで平年を上回って経過したが、穂揃期では、平年並だった。



図－4 草丈の推移
(図中の2本の点線は過去の生育の最高値と最低値を示す。)

② 茎数・穂数

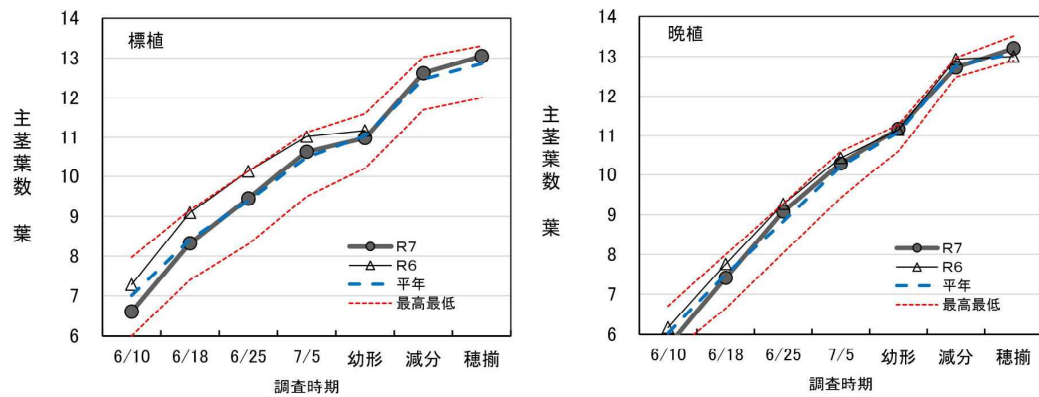
標植の茎数は6月上旬から平年を下回って経過し、6月下旬には平年に近い茎数まで回復したが、以降、穂揃い期まで平年を大きく下回って経過した。晩植は6月下旬に平年を上回るなど順調な茎数の推移だったが、穂揃い期では平年をやや下回る茎数だった。



図－5 茎数・穂数の推移
(図中の2本の点線は過去の生育の最高値と最低値を示す。)

③ 葉数

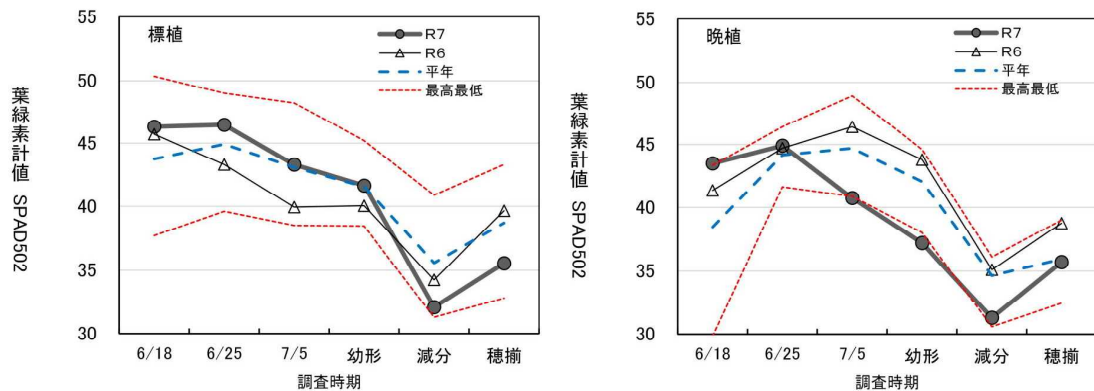
両区とも6月中旬以降は平年並の葉数の経過だった。標植の総葉数は平年より0.2葉多く、晩植も平年より0.1葉多かった。



図－6 主茎葉数の推移
(図中の2本の点線は過去の生育の最高値と最低値を示す。)

④ 葉色（葉緑素計値）

標植は、幼穂形成期まで平年並～やや上回って推移したが、減数分裂期に急落し、穂揃期も平年を下回った。晩植は7月上旬以降平年を大きく下回って推移し、穂揃期は平年並だった。



図－7 葉緑素計値の推移
(図中の2本の点線は過去の生育の最高値と最低値を示す。)

⑤ 出葉期

標植は、7葉出葉まで平年より遅く経過し、8葉から11葉は平年並の出葉だった。7月上旬以降の12葉と13葉の出葉は平年より3～4日早かった。晩植は、6月末の11葉の出葉まで、ほぼ平年並で経過したが、13葉の出葉は平年より3日早かった。

表－9 出葉期

試験区	年次	出葉期								
		5葉	6葉	7葉	8葉	9葉	10葉	11葉	12葉	13葉
標植 (5月15日移植 基準)	R7	5/25	6/1	6/7	6/12	6/17	6/23	6/30	7/7	7/15
	R6	5/23	5/30	6/4	6/9	6/14	6/18	6/25	7/6	7/14
	平年	5/23	5/29	6/4	6/11	6/16	6/22	7/1	7/11	7/18
	平年差	+2	+3	+3	+1	+1	+1	-1	-4	-3
晩植 (5月25日移植 基準)	R7	6/1	6/7	6/12	6/17	6/21	6/25	7/3	7/11	7/18
	R6	5/31	6/6	6/10	6/14	6/20	6/24	7/2	7/11	7/19
	平年	5/31	6/6	6/11	6/16	6/21	6/27	7/4	7/13	7/21
	平年差	+1	+1	+1	+1	±0	-2	-1	-2	-3

注：標植の平年値は、H12～R6までの平均。晩植の平年値は、H29～R6までの平均。

移植時葉数の平年値は標植は3.4葉、晩植は3.6葉。本年は標植は3.2葉、晩植は3.5葉。

⑥ 生育ステージの平年比較

標植は、幼穂形成期が7月7日（平年差－3日）、減数分裂期は7月18日（同－5日）、出穂期は7月25日（同－6日）だった。晩植においても、幼穂形成期は平年より3日早く、減数分裂期も5日早かった。出穂期は晩植区の設置以降最速の7月29日で平年より5日早かった。

本年の出穂期と出穂期以降の気温を踏まえると、成熟期は令和6年並、またはさらに早まることが考えられる。

表－10 生育ステージ

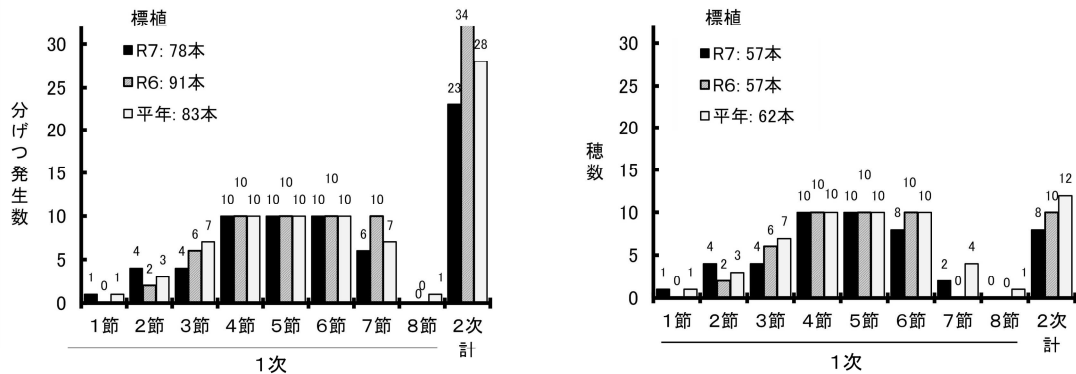
試験区	移植日基準	幼穂形成期			減数分裂期			出穂期			成熟期		
		R7	R6	平年	R7	R6	平年	R7	R6	平年	R7	R6	平年
標植	5/15	7/7	7/6	7/10	7/18	7/18	7/23	7/25	7/25	7/31	9/4	9/13	
	(平年差)	(-3)			(-5)			(-6)					
晩植	5/25	7/11	7/11	7/14	7/22	7/23	7/27	7/29	7/30	8/3	9/9	9/15	
	(平年差)	(-3)			(-5)			(-5)					

注1：中苗移植、平年は標植ではH12～R6、晩植ではH29～R6の平均。

注2：本年移植日 標植 5/15、晩植 5/26

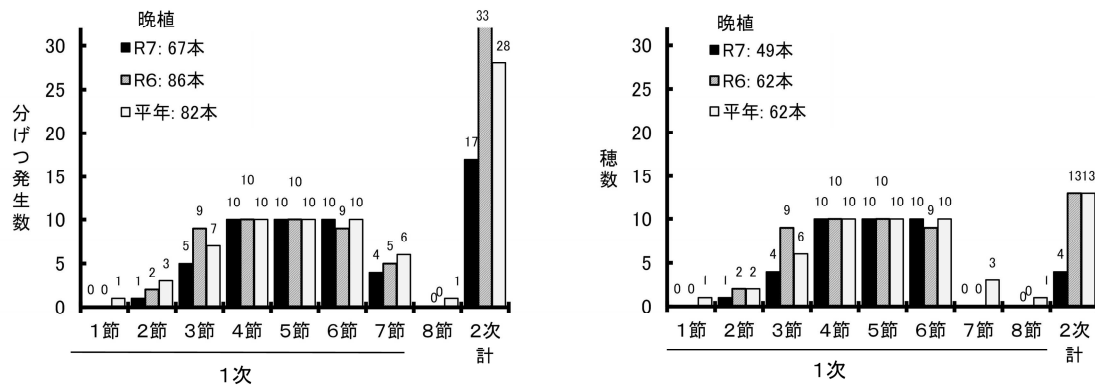
⑦ 有効穂の発生次位・節位

標植の調査株の分けつ発生は、1次3節と2次分けつで平年より少なかった。有効化した穂は、1次分けつでは3節、6節で平年より少なく、2次分けつも平年より少なかった。



図－8 標植の次位別の分けつ発生数（左）と穂数（右）（10個体あたり本数）
注：平年はH13～R6の平均値。図中の茎数計、穂数計は、主茎を含めた合計。四捨五入の関係で、総数と各節の合計は一致しない場合がある。

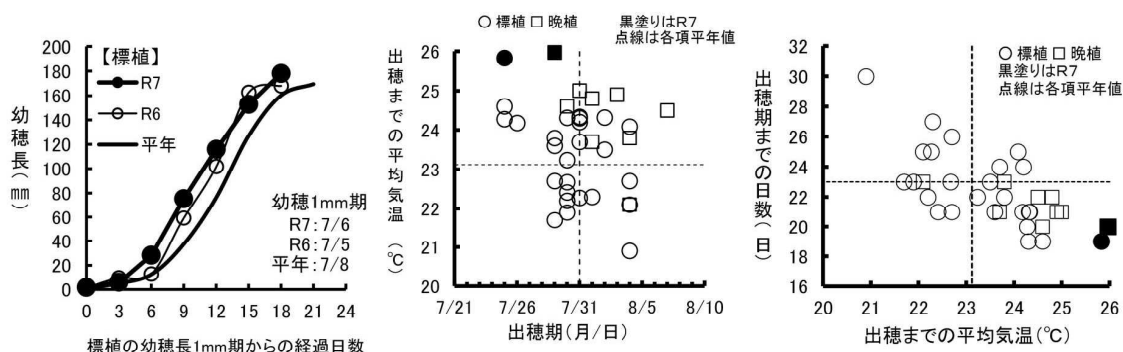
晩植の発生分けつは、1次分けつでは3節と7節で平年より少なく、2次分けつも平年より少なかった。有効化した穂についても、1次分けつでは3節と7節で平年より少なく、2次分けつは平年よりかなり少なかった。



図－9 晩植の次位別の分けつ発生数（左）と穂数（右）（10個体あたり本数）
注：平年はH29～R6の平均値。図中の茎数計、穂数計は、主茎を含めた合計。四捨五入の関係で、総数と各節の合計は一致しない場合がある。

⑧ 幼穂長と出穂期

標植の幼穂1mm期は、平年より2日早い7月6日だった。幼穂長は、幼穂1mm期の6日後で平年よりかなり長くなり、以降は平年を大きく上回って経過した。出穂期は7月25日で平年より6日早く、幼穂1mm期から出穂期までの平均気温は25.8℃で平年より2.6℃高く、その日数は19日で平年より4日短かった。



図－10 幼穂長と出穂期、気温の関係

注：平年値は標植におけるH12～R6の平均（晩植は省略）

⑨ 出穂期10日後の籾殻の大きさと籾数

標植の籾殻長は6.90mm（平年比95%）、籾殻幅は3.57mm（同104%）だった。1株平均穂数は16.7本（同78%）、1穂平均籾数は75.0粒（同109%）、1株当たり籾数は1,253粒（同85%）だった。1穂平均籾数は平年より多かったが、穂数が平年よりかなり少なかったため、1株籾数は平年より少なかった。

晩植では、籾殻長は6.79mm（平年比93%）、籾殻幅は3.54mm（同101%）で、標植と同様に籾殻長が短かった。また1株平均穂数は19.0本（同93%）、1穂平均籾数は74.3粒（同99%）であり、1株当たり籾数は1,412粒（同92%）だった。標植と同様に1株平均穂数が平年より少なかったことにより、1株平均籾数は少なかった。

表－11 出穂期10日後の籾の大きさ、穂数、籾数調査

調査項目	標植				晩植			
	R7	R6	平年	平年差・比(%)	R7	R6	平年	平年差・比(%)
出穂期(月/日)	7/25	7/25	7/31	-6	7/29	7/30	8/3	-5
籾長(mm)	6.90	6.90	7.26	95	6.79	7.06	7.30	93
籾幅(mm)	3.57	3.27	3.43	104	3.54	3.50	3.50	101
1株平均穂数	16.7	22.6	21.5	78	19.0	20.7	20.5	93
1穂平均籾数	75.0	69.3	68.9	109	74.3	68.6	75.0	99
1株当たり籾数	1,253	1,563	1,479	85	1,412	1,420	1,532	92

注 平年値は、標植:H12～R6、晩植:H29～R6の平均値

⑩ 出穂後の気象

標植の出穂期翌日から20日間（7月26日～8月14日）の積算平均気温は、517℃（平年差＋35℃）、積算日照時間は135h（平年比111%）だった。出穂期後1～10日間の気温がかなり高く、日照時間もかなり多く、日気温較差も大きかった。

晩植の出穂期翌日から20日間（7月30日～8月18日）の積算平均気温は、510℃（平年差＋29℃）、積算日照時間は150h（平年比122%）だった。

表－12 出穂期翌日から10日間毎の気象経過

試験区	出穂期後日数	本年値・平年差・平年比%											
		平均気温		最高気温		最低気温		降水量		日照時間		日気温較差	
		本年 積算℃	平年差 ℃	本年 積算℃	平年差 ℃	本年 積算℃	平年差 ℃	本年 積算mm	平年比 %	本年 積算hr	平年比 %	本年 積算℃	平年差 ℃
標植	10日（1～10日後）	276	35	344	53	216	17	0	0	93	156	128	36
	20日（11～20日後）	241	0	291	-2	210	11	305	461	42	67	81	-13
晩植	10日（1～10日後）	268	26	331	36	220	20	252	424	79	128	110	16
	20日（11～20日後）	242	3	297	6	198	1	76	105	71	117	99	6

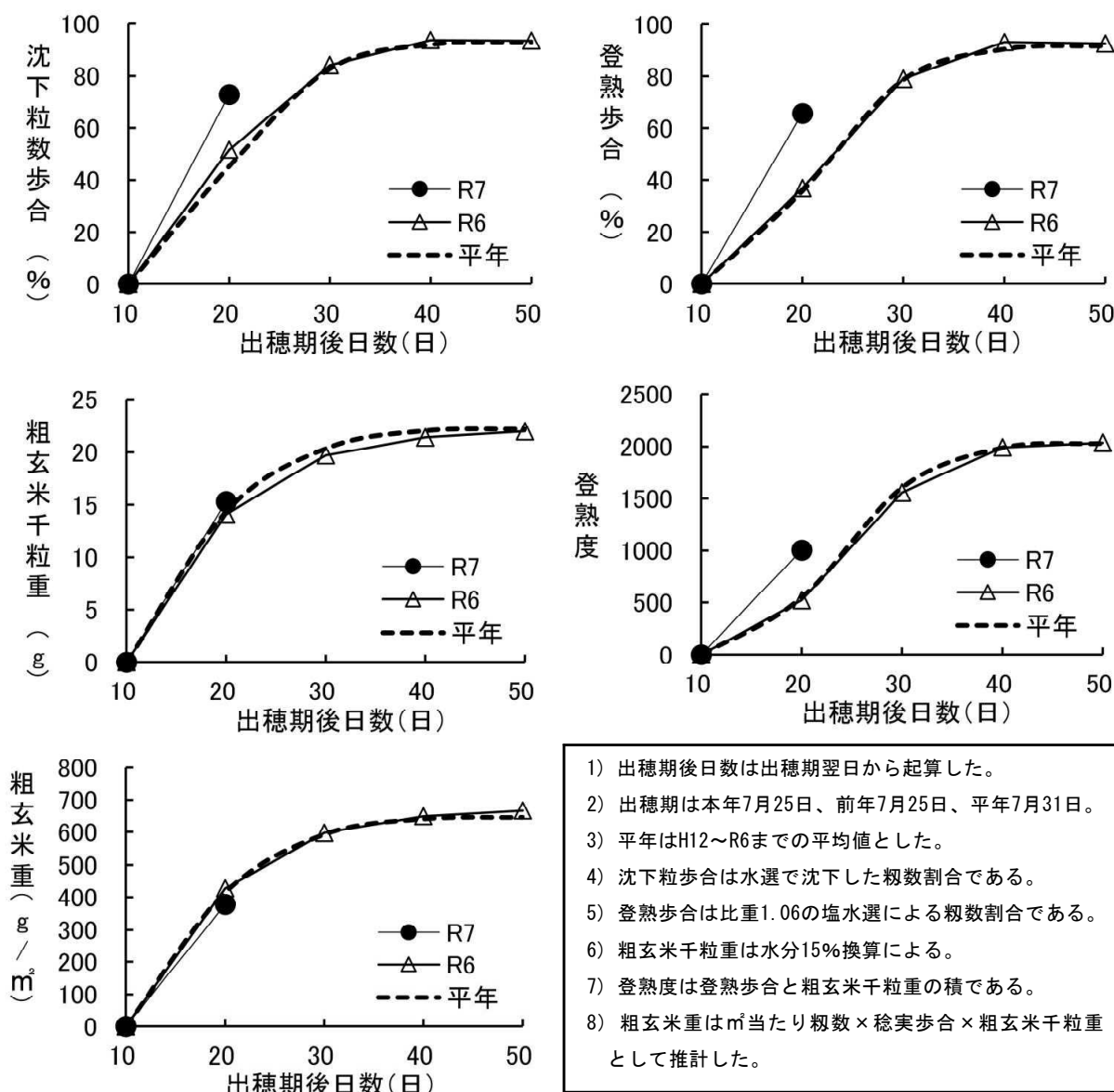
注1：本年の出穂期は標植7/25、晩植7/29。大正寺のアメダスを使用。

注2：値は出穂期翌日から10日毎の積算による。

⑪ 登熟の推移

標植の出穂期20日後の沈下粒数歩合は72.9%（平年差+27.8%）、登熟歩合は65.7%（同差+29.9%）、粗玄米千粒重は15.3g（同比107%）、登熟度は1006（同差+458）で、それぞれ平年を上回ったが、粗玄米重は378g/m²（同比91%）で平年を下回った。

出穂前～出穂後10日間は高温多照で経過しており、初期登熟は平年を上回る速さで進んでいる。しかし、標植は穂数不足によりm²当たり粒数が不足しており、粗玄米重は平年を下回ったと考える。



図－11 標植における出穂期後20日間の各種登熟調査

(2) 直播作況試験

1) 幼穂形成期・減数分裂期

幼穂形成期は7月18日で平年並であった。平年に比べ、草丈は75.6cm（平年比116%）で長く、 m^2 当たり茎数は500本（同83%）と少なかった。葉数は10.9葉（平年差+0.4葉）と多く、葉緑素計値は37.9（平年比96%）と低かった。

減数分裂期は7月26日と平年より早かった。平年に比べ、草丈は83.2cm（平年比106%）と長く、 m^2 当たり茎数は445本（同81%）と少なかった。葉数は12.2葉（平年差±0葉）、葉緑素計値は34.3（平年比98%）といずれも平年並であった。

表-13 農試直播作況ほ場の生育概況（あきたこまち、湛水土中条播、5月9日播種）

生育 ステージ	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	草丈			m^2 当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
				本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
幼穂形成期	7/18	±0	-1	75.6	105	116	500	95	83	10.9	+0.4	+0.4	37.9	92	96
減数分裂期	7/26	-1	-5	83.2	102	106	445	85	81	12.2	+0.3	±0.0	34.3	87	98

注1) 平年値：過去10年間（H27～R6）の平均値

2) 出穂期・穂揃期

出穂期は8月5日、穂揃期は8月7日でいずれも平年より早かった。

穂揃期頃の生育は m^2 当たり穂数432本（平年比92%）、葉数13.0葉（平年差+0.4葉）、葉緑素計値33.1（平年比103%）、1穂当たり着粒数74.8粒（同106%）、 m^2 当たり籾数32.3千粒（同99%）であった。

平年に比べ m^2 当たり穂数は少なかったが、1穂当たり着粒数は多かったことから、 m^2 当たり籾数は平年並となった。また、葉数は多く、葉緑素計値はやや高かった。

表-14 農試直播作況ほ場の生育概況（あきたこまち、湛水土中条播、穂揃期頃調査）

出穂期			穂揃期			m^2 当たり穂数			葉数		
本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)
8/5	+1	-3	8/7	±0	-5	432	96	92	13.0	+0.5	+0.4
葉緑素計値			1穂当たり着粒数			m^2 当たり籾数					
本年	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)			
33.1	96	103	74.8	101	106	32.3	97	99			

注1) 平年値：過去10年間（H27～R6）の平均値

注2) 葉緑素計値は止葉を測定した。

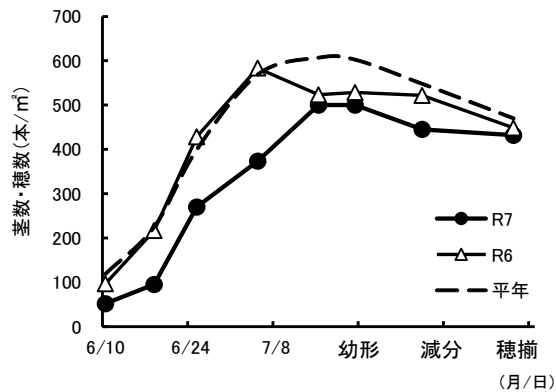
注3) 窒素施用量：基肥0.8kg/a（LP70：速効性＝1：1）

3) これまでの生育経過

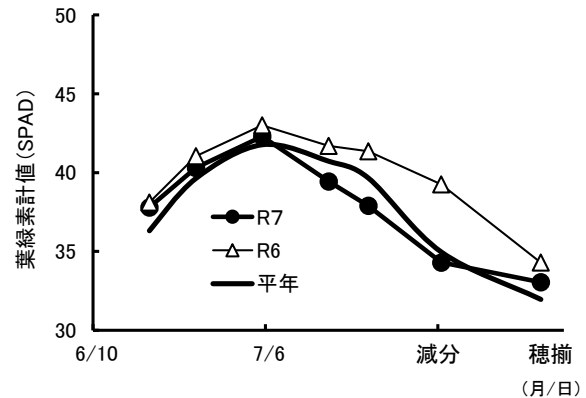
本年は初期の苗立不足により、茎数は平年よりも少なく推移し、穂数も平年より少なかった。

m^2 当たり穂数は平年よりも少なかったが、1穂当たり着粒数が多かったため、 m^2 当たり籾数は平年並となった。

葉緑素計値は生育期間を通して、平年並～やや低く推移した。特に7月中旬～下旬にかけて、降雨が少なく、高温が続いたことにより、葉緑素計値は平年よりも低くなった。（表-13、14、図-13、14）。



図－12 農試直播作況ほ場の茎数の推移



図－13 農試直播作況ほ場の葉緑素計値（SPAD値）の推移

（3）出穂後の気象経過と刈り取り適期（各地域水稻定点調査ほ）

1）出穂の状況と気象経過

水稻定点調査ほ（あきたこまち）の出穂期は、全県で平年より4日早かった。6月中旬以降は高温で経過し、水稻の生育ステージが前進した。ただし、増葉茎が見られ、ほ場内での出穂にバラツキが大きく、出穂開始から穂揃までの期間は平年より長かったと推定される。

各地域とも出穂期翌日から8月20日までの積算気温は、平年より高く、積算日照時間もかなり多く、高温多照で経過している。

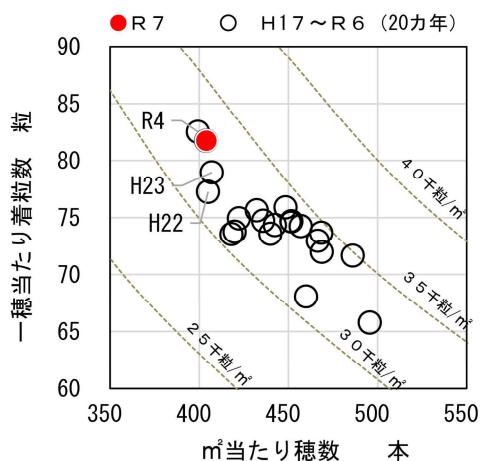
表－15 水稻定点調査「あきたこまち」出穂期翌日からの積算気温と積算日照時間（8/20まで）

地域	出穂期			(日数)	出穂期翌日～8/20					
	R7 (月/日)	平年 (月/日)	平年差 (日)		積算気温（℃、％）			積算日照時間（h、％）		
					R7	平年	平年比	R7	平年	平年比
鹿 角	7/28	8/2	－5	23	576	534	108	159	128	124
北秋田	7/27	7/31	－4	24	625	579	108	163	139	117
山 本	7/29	8/1	－3	22	580	541	107	170	137	124
秋 田	7/27	7/30	－3	24	654	609	107	196	144	136
由 利	7/30	8/2	－3	21	546	522	105	159	138	115
仙 北	7/28	8/2	－5	23	602	568	106	176	139	127
平 鹿	7/30	8/3	－4	21	562	527	107	148	123	120
雄 勝	7/29	8/2	－4	22	575	536	107	172	132	130

注) 出穂期は各地域振興局調査による。

2）水稻の生育状況（穂揃期調査）

8月18日現在、穂数は平年比91%で少なかったが、一穂当たり着粒数が平年比110%と多かったことから㎡当たり粒数は平年並となっており、令和4年や平成22、23年と同様な粒数構成になっている。この類似3カ年の登熟歩合は、81.7～85.0%で平年より低かったことを踏まえ、本年は十分な登熟が得られるよう、登熟期後半の管理を徹底する。



図－14 穂数と一穂当たり着粒数および粒数の関係

水稲定点調査ほの年次平均（H17～R6）とR7平均を図示。図中斜線は㎡当たり粒数を表す

3) 刈り取り適期の判定（稲作指導指針p.79～80を参照）

水稲定点調査ほ（あきたこまち）の出穂期から刈り取り適期を各地アメダスの積算気温により推計すると、鹿角は9月7～12日、北秋田は9月4～8日、山本は9月5～10日、秋田は9月2～6日、由利は9月7～11日、仙北は9月4～9日、平鹿と雄勝は9月6～11日である。今後も高温で経過すると、これらから2日程度早まる可能性があり、各ほ場の刈取予想においても留意する。最終的な刈取判断は、籾の黄化程度90%とする。

8月18日調査による「あきたこまち」の㎡当たり粒数は平年並であり、高温多照で登熟の進みも早いことから、刈り遅れに最も注意する。さらに、倒伏リスクの大きいほ場もあることから、品質の低下を避けるためにも、刈り取り適期を適正に判断する。

表－16 積算気温及び日照時間による刈り取り時期の目安（8/20まで）

地域	出穂期			積算気温の到達日※		積算日照時間到達日※	
	R7 (月/日)	平年 (月/日)	平年差 (日)	950℃ (月/日)	1050℃ (月/日)	200h (月/日)	265h (月/日)
鹿 角	7/28	8/2	-5	9/7	9/12	8/28	9/10
北秋田	7/27	7/31	-4	9/4	9/8	8/27	9/8
山 本	7/29	8/1	-3	9/5	9/10	8/25	9/5
秋 田	7/27	7/30	-3	9/2	9/6	8/21	9/1
由 利	7/30	8/2	-3	9/7	9/11	8/27	9/7
仙 北	7/28	8/2	-5	9/4	9/9	8/25	9/6
平 鹿	7/30	8/3	-4	9/6	9/11	8/30	9/12
雄 勝	7/29	8/2	-4	9/6	9/11	8/26	9/7

※アメダス観測値は8/20まで。以降は平年値を用いて計算

注) 出穂期は各地域振興局調査による水稲定点調査ほの平均

※あきたこまち570kg/10a収量水準での刈り取り適期判断の目安。

用語解説：「出穂期後の積算気温、積算日照時間」

- ・「出穂期後の積算気温、積算日照時間」とは出穂期の翌日から日々の平均気温、日照時間を積算したもの。
- ・出穂期とは穂揃期のことではなく、全茎数の40～50%が出穂した時期のこと。
- ・出穂とは止葉の葉鞘から穂の先端（芒は含まない）が現れること。

各地域における技術情報等のお知らせ

各地域における技術情報等についての問い合わせは、最寄りの地域振興局農林部農業振興普及課に電話またはFAXでお願いします。

各地域振興局	電話番号	FAX番号
鹿 角 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-23-3683	0186-23-7069
北秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-62-1835	0186-63-0705
山 本 地域振興局農林部農業振興普及課	0185-52-1241	0185-54-8001
秋 田 地域振興局農林部農業振興普及課	018-860-3410	018-860-3363
由 利 地域振興局農林部農業振興普及課	0184-22-8354	0184-22-6974
仙 北 地域振興局農林部農業振興普及課	0187-63-6110	0187-63-6104
平 鹿 地域振興局農林部農業振興普及課	0182-32-1805	0182-33-2352
雄 勝 地域振興局農林部農業振興普及課	0183-73-5114	0183-72-6897

OSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）LINEで情報発信を行っています

秋田県稲作技術情報

「秋田の米ぢから」



水稻栽培に関する情報をリアルタイムで発信しています。

<主な配信内容>

- ・ 秋田県内の水稻の生育状況
- ・ 水稻および大豆の技術情報
- ・ 異常気象対策
- ・ その他、秋田米に関する情報



こちらのQRコードから
登録できます

記事についてのお問い合わせは

秋田県農業試験場
秋田県病虫害防除所
秋田地方气象台
東北農政局秋田県拠点
秋田県農林水産部水田総合利用課（農産・複合推進チーム）
園芸振興課（調整・普及チーム）

TEL 018-881-3330
TEL 018-881-3660
TEL 018-864-3955
TEL 018-895-7303
TEL 018-860-1786
TEL 018-860-1801

【次回の発行日は12月19日（金）の予定です】